

Café des open



三浦一族

Menu 第8回

三浦義村と盟友たち

文／谷合伸介（横須賀市立中央図書館 郷土資料室）

2022年放送のNHK大河ドラマ「鎌倉殿の13人」では、鎌倉幕府の2代執権北条義時を主人公にその時代を生き抜いた武士たちの群像劇が描かれました。なかでも、義時の盟友として活躍した人物が三浦義村でした。今回は、義村からみた盟友たちとの関係を史料から振り返ってみたいと思います。

義村が三浦氏の跡を継いだのは、父義澄が没した正治2年（1200）の頃で、源頼朝が没し御家人同士の対立が激しさを増す時期と重なりました。義村は、梶原景時の乱以後、様々な事件や政争に関わり、特に和田合戦や承久の乱では、同族と決別することとなるも、義時側に味方し、その戦いを勝ち抜くことで三浦氏を北条氏に匹敵する存在へと押し上げていきました。『承久記』には、義村と義時は若い頃から互いに心変わりしないと約束した間柄であったことが記されていますが、結果として2人は様々な事件や政争において常に同じ行動をとっていたことから、ドラマの中でも盟友として描かれたでしょう。

では、義村と義時との日常の交流や関係性が見える史料はないのでしょうか。『吾妻鏡』には政務や武家儀礼等で2人の接点となる記述がみられますが、義時晩年期を中心に、より両者の関係性を窺い知る記事を確認することができます。承久4年（1222）2月12日、一条実雅（いちじょうさねまさ）という人物に嫁いでいた義時の娘が女児を出産します。この時、義時以下北条家の面々が集まりますが、その中に義村の姿もありました。出産した義時の娘の兄弟には北条政村がおり、その烏帽子親は義村でした。また、義村の娘も北条泰時（義時の子）に嫁いでいたこともあり、義村はその親戚筋として北条一門と同等に扱われていたものと思われます。さらに、義村と義時との交流の一端を示す記事が同年5月25日条にあります。この日、義時は三浦の地を訪れました。義時は、海辺の散策などを楽しみましたが、この際、義村は贅を尽くして義時をもてなしたと記されています。さらに、翌年（1223）10月4日には、義時は義村の招きにより、義村の田村別荘（平塚市）を訪れ、この地に2日間滞在し



北条義時法華堂跡

ました。三浦や田村といった地は、義村の所領であり、そこを義時が訪れ田村には数日間滞在していたという事実は、両者の近い間柄を示すものといえましょう。義時は、翌年の6月13日、62歳でこの世を去ります。18日には葬送が行なわれ、北条一門とともに泰村（義村の子）が参列し、また22日には義村が臨時の仕事を執り行い義時の冥福を祈りました。

さて、義村の盟友には、もう1人忘れてはならない人物がいます。それが、結城朝光（ゆうきともみつ）です。母が源頼朝の乳母であったことから、朝光は頼朝の烏帽子子となり、側近として仕え厚く信頼されました。しかし、頼朝の没後、こうした頼朝への思慕を頼家への異心とみた梶原景時の讒言により、朝光は失脚の窮地に陥ります。この時、朝光が相談したのが義村でした。『吾妻鏡』は、義村と朝光の関係を「断金朋友」と記しています。これは、金をも切断できるほどの強固な友情で結ばれていた友人という意味です。義村は、和田義盛らと連携し、景時に対する66名の御家人の弾劾状を政所に提出し、景時を失脚させ、朝光の窮地を救いました。朝光は、義村が亡くなった後も生き抜き、建長6年（1254）、88歳で没します。宝治元年（1247）、三浦泰村が北条時頼に討たれ三浦一族が滅亡した際、朝光は下総国から鎌倉に参じ時頼と対面し、「自分が鎌倉にいたなら、泰村がこのような誅罰を受けるようなこともなかった」と申し述べたといひます。ここでも、『吾妻鏡』は、朝光と義村・泰村2代のことを「知音」（無二の友）と記しており、強い結びつきがあったことを伝えていきます。

このように、義時と朝光は、義村の盟友ともいえるべき関係にありましたが、この3人が連携して対処した一件もありました。それは、北条時政の妻であった牧の方から源実朝を守ろうとした時です。2代将軍源頼家の病や政務への危うさから、北条政子は頼家を出家させ、弟の千幡（源実朝）を将軍に立てようとした。そのため、建仁3年（1203）9月10日、千幡は、北条時政の屋敷に移されましたが、その5日後、千幡の乳母の阿波局（北条政子の妹）が、牧の方に千幡を預けていることに不安を訴え、政子はすぐに引き戻すように義時・義村・朝光の3名に命じます。結果、彼らの働きにより、千幡を無事取り返すことに成功しました。

今回は、義村と盟友たちとのエピソードを紹介しました。「鎌倉殿の13人」の放送は終了しましたが、このコーナーは続きますので、本年もよろしくお願いいたします。